

このpdfは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第4巻(くろしお出版・2008年)の内容見本です。ISBN 978-4-87424-410-4。無断引用はご遠慮ください。『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/edu\_top1.html

近現代文学史(白川豊)

## 近現代文学史



白川 豊 (しらかわ・ゆたか)

### 1. はじめに

朝鮮の近代文学の起点をいつからと考えるかは、なかなか難しい問題である。前近代との脈絡を重視する立場から、朝鮮王朝の英・正時代(英祖(영조)・正祖(정조)の時代=18世紀後半)にまで遡らせる見方<sup>1)</sup>すらある。しかしここでは政治史的な近代の出発点となった1876年の江華条約(강화조약: 正式名称は「大日本大朝鮮修好条規」)から1894年の甲午更張(갑오경장: 近代改革)を経て、後の開化期小説の開拓者となった李人植(이인직 1862-1916)の日本留学時点である1900年をおおよそその起点と考えておく。

そもそも「近代文学」が成立するためには、政治・経済・社会上の近代的制度改革というシステム面と、人々の意識改革というメンタル面の両方が改まることが背景になくは難しいと思われる。特に意識面は制度の変革より普通、かなり遅れるものである。日本の場合も1854年の開港から明治維新(1868)を経て、二葉亭四迷(ふたばていしめい)が1887年に近代小説「浮雲(うきぐも)」を発表するまで実に33年かかっている。一步譲ってその前段階の政治小説の時期に遡っても、矢野龍溪(やのりゅうけい)の「経国美談(けいこくびだん)」(1883)が出るまでに29年の歳月を要している。朝鮮の場合は代表的な新小説「血의 涙(혈의 눈 血の涙)」(1906)年に発表されているので、やはり江華条約、開港以来30年経っている。

このように見ると朝鮮の30年という近代文学への胎動期間は何も朝鮮だけの特殊なものではないことがわかる。但し、同じ30年ではあっても日本との「時差」が20数年あることは非常に重要である。一足先に開港し、ひたすら〈西洋近代〉を摂取しながらついには帝国主義的膨張への道を歩んだ明治日本と、その侵略の標的となった朝鮮では同じ近代化といっても、そのベクトルは全く違っていた。この政治的な時代背景ゆえに、朝鮮の近代文学は西洋からの直接的な影響関係よりも、圧倒的に日本を通した変則的な発達過程を辿ることになった。近代文学の本格的な出発と植民地化の時期がほぼ重なっていたことから、そのような状況下

1) 金允植・김현(1973)での見解など。

で果たして真の近代文学が成立しえたのかという論議さえある。<sup>2)</sup>しかしここではさしあたり、以上のことを朝鮮近代文学を語る際に常に念頭に置いておくべき前提条件と考えつつ、次章以下で具体的な展開過程を見ていくことにする。

## 2. 開化期の文学状況

ここでは本格的な近代小説とされる李光洙(이광수 1892-1950)の長篇「無情」(무정)が発表された1917年までの10数年間を開化期と考えておく。

前述したように、李人植は1900年から1903年まで東京に来ていた。奇しくもこれは夏目漱石が33歳からロンドンに行っていた時期である。李人植はすでに40歳に近く、明治日本の制度・文物視察の目的で来日したのである。彼は午前は東京政治学校で聴講する傍ら、午後には都新聞の見習い記者もこなし、夕方からは浅草で観劇という生活をしていらしい。彼の考えは日本に学んで朝鮮の近代化を成し遂げたいというもので、政治意識の強い人だったようである。帰国後の演劇の改良(新劇)や新小説(신소설)の試みもその思考の一環と考えられる。もともと文士ではないのだが、生まれてきた時代と彼の意識が文学史上、開化期の代表的な作家に押し上げたのである。

代表作は「血斗涙」で、日清戦争の渦中の平壤(평양)で一家離散となった少女・玉蓮(옥련)が主人公である。彼女は日本の井上軍医に助けられ大阪の井上家で養育されるが、養母の虐待で出奔し、汽車で乗り合わせた朝鮮人の具(구)青年の厚意で二人して渡米する。優秀な成績で高校を卒業するや新聞にその記事が載り、アメリカに来ていた彼女の実父がこれを目にして再会がかなうというハッピーエンドの物語である。偶然の連続、善人・悪人とはっきり二分される人物形象など、とても近代小説とは言いがたい面も多い。但し、文体が口語に近づいたことや、近代文明の利器たる汽車が登場することなどに新しさが出ているのである。出版社側がこの小説に〈新小説〉と銘打ったことから、現在ではそれまでの〈旧小説〉に対する新しい呼称のようになっているのだが、厳密にはさまざまな開化期小説のタイプの一つと考えるのが妥当であろう。

実はこの小説の続篇が「牡丹峰」(모란봉)と題して1913年に書かれている。しかしこの作品は玉蓮を横恋慕する別の青年が登場してのドタバタ劇になっており、ついには新聞連載が中断された。「血斗涙」では朝鮮国をよくするために、

2) 南富鎮(2006:114)など。

父も娘も後に婚約者となる具青年も皆、渡米するという設定で、作者の啓蒙的な意図が曲がりなりにも窺えるのだが、併合後に書かれた続篇ではそのような色彩は消えている。このような現象は他の開化期の作家にも見える傾向で、李海朝(이해조 1869-1927)も併合前後までは愛国啓蒙路線の作品を書いていたが、それ以降はこれが見られない。安国善(안국선 1878-1926)の代表作「禽獸會議録」(금수회의록 1908)でも動物に人間社会を風刺させるという寓話形式による作者の批判意識が見え隠れしているが、これも併合前のことだった。

さて詩歌の方に目を転ざると、早熟の天才・崔南善(최남선 1890-1957)の活躍があった。崔南善もやはり併合前に東京に留学していたが、早稲田の高等師範部を1908年に中退して帰国、月刊の『少年』(소년)誌を発行してその創刊号に新体詩「海에게서 少年에게」(해에게서 소년에게 海から少年へ)を載せた。少年にたくましく成長せよと呼びかけるこの詩が、やはり彼の啓蒙意識から発しているのは間違いない。朝鮮を救うには青少年に期待するしかないと考えた崔南善は、この時まだ18歳だった。自分には詩才がないけれども新詩を書ける人間がないので書いたと本人は述懐するが、それまで定型詩しかなかった朝鮮に非定型のいわゆる「新体詩」が出現したのは画期的だった。興味深いのは、同じ1908年に崔南善が唱歌「京釜鉄道歌」(경부철도가)も書いていることである。この詩は4・3・5音からなる定型詩で、やはり啓蒙意識が盛られている。「一日中乗ってきた汽車は / 我が物の如く座っていても実は他人のもの」(食前부터 밤까지 타고온 汽車 / 내것같이 앉아도 實狀남의것)<sup>3)</sup>と、日本が敷設した鉄道に安穩と座ってられないことを唱っている。日本の「鉄道唱歌」に見える〈近代讃歌〉の趣きとは非常に対照的と言えよう。

開化期の知識人の中で〈近代〉に対して自覚的だった文人はまだ少なかったもので、李人植にせよ崔南善にせよ、一人でいくつもの役目を担わねばならなかったのである。

### 3. 近代文学への道と李光洙

1910年を前後する時期に、後に作家や詩人となった文人たちの多くが日本に留学しているのが朝鮮の近代文学の特徴である。しかも彼らは15歳前後という少年期に来日したため、その日本体験は人格形成にも多大な影響を及ぼした。彼らの

3) 崔南善(1908)「京釜鉄道歌」の一部。ハングルの綴り字は現行のものに改めた。

中には金億(김억 1893-?)らのように『泰西文芸新報』(태서문예신보 1918-1919)なる週刊雑誌に西洋文学の紹介や翻訳を始めた者もいた。そんな中で早稲田大学に留学中だった李光洙が東京の下宿から書き送ったのが『毎日申報』(매일신보)紙に連載された「無情」(1917)である。<sup>4)</sup>京城学校の英語教師・李亨植(이형식)が、幼馴染の英采(영채)と家庭教師先の娘・善馨(선형)という二人の女性の間で気持ちが揺れながらも、ついには恋愛感情などを超越して朝鮮をよくするために皆で留学の途につくまでの波乱万丈の物語である。表面的には通俗的な話であるが、優柔不断な李亨植の心情の描写や英采の来し方の叙述には作家自身の孤独で辛かった過去が投影されており、その一方では救国啓蒙の意図も読み取れるなど、多彩な読み方が可能な長篇となっている。開化期小説からは一歩進んだ近代小説に近づいてはいるものの依然、偶然に頼るストーリー展開や、汽車という舞台装置の役割の大きさなど「血の涙」とも共通する点も見える。

実は李光洙は、明治学院普通部に在学中に「愛か」(1909)という日本語短篇を書いている。この作品は朝鮮人少年が同級の日本人を同性愛的に片思いする内容で、愛情飢渴症気味だった当時の李光洙の心境を赤裸々に見せているのである。後の文豪がこのような作品から出発したことは韓国文学史上ではあまり取り上げられないが、内面描写を重視する日本文学からの彼の影響度を考える上でも重要な作品と思われる。しかし李光洙はその後、朝鮮を代表するオピニオンリーダーとなったため、なかなか率直な心情吐露もしにくい立場に追い込まれていく。

#### 4. 文芸同人誌から商業文芸誌へ

1919年以降、崔南善や李光洙の後輩たちが文芸同人誌を発刊するようになる。三・一運動直前の東京で1919年、金東仁(김동인 1900-1951)らが『創造』(창조)を刊行した。その後、留学帰りの文学青年たちによって1920年に廉想渉(염상섭 1897-1963)らの『廢墟』(폐허), 1922年に朴英熙(박영희 1901-?)や玄鎮健(현진건 1900-1943)らの『白潮』(백조)が相次いで出た。写実主義、浪漫主義などと雑誌の傾向を分類することもあるが、実際はさまざまな文芸思潮が混在していた。同人たちは東京で接した日本文学や西洋文学の中から自分の好みに応じた作風を摂取したため、本来の文学史的な思潮の変遷を無視した同時移入の形となったのである。これらの雑誌の中で『創造』創刊号に載った朱耀翰(주요한

4) 日本語訳に李光洙(波田野節子訳 2005)がある。

1900-1979)の散文詩「불노리」(燈祭)が近代詩の嚆矢として名高い。

さて、これらの同人誌は短命に終わったものが多かったが、1924年に『朝鮮文壇』(조선문단)なる商業文芸誌が創刊される。文人たちの数も増え、いよいよ書店販売できる月刊文芸誌が出せるようになったわけである。主宰者は李光洙で、投稿システムも整い、商業広告の載ったこの雑誌にはさまざまな傾向の文人が結集する形となった。この雑誌は第6章で述べるプロレタリア文学には対抗しながら、休刊の時期を挟んで1935年まで刊行された。

## 5. 金東仁と廉想渉

『創造』と『廢墟』を率いた金東仁と廉想渉はライバルだった。年齢は廉想渉が3歳上だが二人とも1910年代の大半を日本で過ごし、1919年頃から作品を発表し始めている。金東仁は「唯我独尊」的な性格の平壤の地主の息子で、自分の上に君臨する李光洙に対抗するため、李光洙の文学を啓蒙主義一辺倒だと批判し、自分は芸術至上主義で行くことを宣言した。しかし唯美主義的とされる彼の短篇「狂炎소나타」(광염소나타 狂炎ソナタ 1929)や「狂画師」(광화사 1935)などは唯美主義の主張そのものに止まっている。むしろ、堅実な農家の娘が自堕落な夫のせいで次第に周囲の男たちの狭間で転落していく過程を簡潔に描いた初期の代表作「감자」(イモ 1925)が、この作家の社会批判意識を垣間見せた好篇と言える。金東仁にはこのほか植民地状況にコミットし、彼の民族意識を露出させた「붉은 산」(붉은 산 赤い山 1932)などシリアスな作品もあるが、それよりもストーリーテラーとしての力量で芥川龍之介あくたがわりゆうのすけばりの才能を見せた作家である。「大首陽」(대수양 1941)など数多くの歴史小説や史譚系列の作品がそれを証明している。

その金東仁の好敵手が写実主義の重厚な作家として立ち現れた廉想渉だった。植民地朝鮮の現実に対する批判意識を遺憾なく発揮した中篇「万歳前」(만세전 1924)は、<sup>5)</sup>主人公の東京留学生の心情や、当時の植民地状況を極めてリアルに描出している。また長篇「三代」(삼대 1931)では、祖父-父-子という三世代の意識の差を〈家〉の内と外の両方からあぶり出して見せている。廉想渉によって朝鮮文壇に初めて真のリアリズム文学が定着したのである。

5) 日本語訳に廉想渉(白川豊訳 2003)がある。

## 6. プロレタリア文学

1917年のロシア革命以後、世界的にプロレタリア文学が勃興してきた。日本留学中にこの潮流に接した朴英熙、<sup>キムギジン</sup>金基鎮（김기진 1903-1988）らは「新傾向」としての階級主義文学を唱え始める。ちょうど関東大震災（1923）後の混乱で留学生たちが大量帰国した時期だった。それまでの朝鮮文学がブルジョア文学だというほどのこともなかったのだが、〈階級〉の大合唱に対して既成の文人たちは〈民族〉を前面に押し出すしかなかった。理論的リーダーの朴英熙はもともと浪漫的な詩などを書いていた人で、1934年には階級文学から「転向」し、ついには「親日文学」にまで行き着いた文人である。そうしてみると彼にとっては「社会主義」が当時のトレンドなファッションと映っていた可能性もある。

1925年、階級主義系列の団体が合併して KAPF（Korea Artista Proleta Federacio：カップ＝朝鮮プロレタリア芸術（家）同盟）が結成されたが、これは合同に時間がかかった日本の NAPF（全日本無産者芸術連盟：日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術家同盟が1928年に合同した団体）の結成より3年早い。その後 KAPF は方向転換（先鋭化）や一斉検挙などを経て1935年に解散に追い込まれるまで文壇で一定勢力を保った。またこの団体には参加しないものの、階級文学の主張には同調する「同伴者作家」も生まれた。

実作の方は<sup>チュソヘ</sup>崔曙海（최서해 1901-1932）の「脱出記」（탈출기 1925）に典型的に見られるように、貧窮そのものを内容とするものが多く、階級意識を際立たせた作品には、<sup>チュミョンヒ</sup>趙明熙（조명희 1894-1942）の「洛東江」（낙동강 1927）などがある。

ところで、プロレタリア文学は本来、労働現場の告発などが主になると思われるのだが、朝鮮の場合、1930年前後にはまだ工場労働者の数も少なく、人口の大部分は農民であったため、代表作とされる<sup>イギヨン</sup>李箕永（이기영 1895-1984）の「故郷」（고향 1933-1934）も農村の話なのである。この長篇は東京留学から帰った農村出身の青年が故郷の農民を指導して小作管理人の横暴と戦い、ついに勝利するという物語であるが、特徴的なのは農民の中から自然発生的に指導者が出てくるのではなく、リーダーが外部から天下って指導するという構造になっていることである。そしてこのタイプの小説が朝鮮の近代小説ではプロレタリア文学以外にも<sup>とくながすなお</sup>李光洙の「鬮」（土 1932-1933）なども含めてかなり多いのである。日本の<sup>とくながすなお</sup>徳永直の「太陽のない街」（1929）や<sup>こばやし た き じ</sup>小林多喜二の「蟹工船」（1929）などとは対照的と言えよう。